

ローマ人への手紙第十回質問

27 それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行いの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。

28 人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるといのが、私たちの考えです。

(三章二七―二八節／新改訳2017)

(1) 義と認められるこの賜物によって、どんな結果に達しますか。

(2) 人はなぜ、もはや自分を誇る理由がないのですか。

(グループ聖書研究・聖書を読む会手引より)





誇る「こと」のできる者はいない

(ロマ三章二七―二八節)

キリストの救いがどんなにすばらしいものであるかということがわかると、わたしたちはこれを計画し、実行される神の偉大さがよくわかります。パウロはキリストの血による贖いによって成し遂げられた救いが、どのような内容を持っているものであるかということを述べてから、その救いから必然的に導き出されて来る結論ないし特徴ともいうべきことについて述べています。それは三つあって、恵みによる救いであるので、だれひとり誇ることできる人はいないということと、その救いは人種的差別をしないということと、律法を確立するということで、それぞれ二七―二八節、二九―三〇

節、三一節にしるされています。今回は、その第一の点、つまり信仰によって義とされた者は、だれひとりとして誇ることもできる人はいないという点について学びたいと思います。

二五―二六節にしるされているキリストの贖いの教理で十分なのに、どうしてこういう三つの事柄をここに付け加えているのかと言いますと、これはすでに何回も言及されて来たことで、今さら新しい事柄ではないのですが、キリストによる救いにおいて重要な事柄であるからです。

二章一七節を見ると、「しかし、もしあなたが自分をユダヤ人ととなえ、律法の上に安んじ、神を誇りとし：」と言われていているように、ユダヤ人は律法を持っていることや、割礼を受けていることなどを誇りとし、自分たちだけが唯一の生けるまことの神を知っていると考えて、誇っていたのです。

このような誇りは、彼らがクリスチャンになったのちも、なかなか捨てきれなかったようです。たとえば、ペテロが異邦人といっしょに食事をしていたとき、そこへエルサレムからユダヤ人クリスチャンが来ると、彼らを恐れて、そこから立つて行ってしまったという事実を考えれば、わかることだと思います。この点については、パウロが強くペテロを非難しているところ(1)です。これは、やはりペテロでさえも、選民としての誇りに固執していた例を見ることができないのではないかと思います。

しかし、選民としての誇りだけの問題ではありません。ユダヤ人は選民としての誇りを持っていたかもしれませんが、ギリシヤ人は知恵の民であることを誇りとし、ローマ人は、

帝国の民であることを誇りとしていました。けれども、たとい神の選民であれ、知恵の民であれ、また帝国の民であったとしても、神の御前にはみな罪人であつて、その点においては、みなひとしく「神の栄光を失つてしまつて」⁽²⁾いるのです。ですから、わたしたちが救われるのは、自分の行ないによるのではなく、わたしません。「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによつて、賜物として義とされるので」⁽³⁾す。

パウロは彼自身について、こうしるしています。「わたしは八日目に割礼を受けた者、イスラエル民族に属する者、ベニアミン族出身の者、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ派の者」⁽⁴⁾。「そして同国人の中で、わたしと同輩の多くの者たちよりもはるかにユダヤ教に身を入れ、先祖たちの言い伝えに對し、きわめて熱心であつた」⁽⁵⁾。しかし、そういうことによつて救われたのではなく、神の主權的な恵みによつて、神の側から救いの御手が差し伸ばされて、救われたのだと語っています。つまり、彼のりっぱな道徳や、哲学や、知識が救いに至らせたのではなく、神の一方的な恵みによつて、救つていただいたわけなのです。自分がりっぱな道徳家であり、高遠な哲学思想や知識を備えていることによつて、救いに入るのだとしたら、人間はきまつてそれを人々に見せびらかし、誇り、ほかの人を輕蔑するものです。ですから、神は人間の傲慢さを打ち砕き、神のあわれみによつて救つてくださるのです。

その最もよい例を、わたしたちは主イエスの譬話の中に見ることができます。それは、ルカによる福音書一八章九―一

四節にしるされてありますが、パリサイ派の人と取税人とが祈るために神殿に行ったという話です。パリサイ派の人は、こう祈りました。「神様。どうぞまちがわないでください。私は、ほかの人々のように、ゆすり取ったり、不正をしたり、姦淫をしたりしませんし、ことに、あそこで祈っている取税人のような者ではございません。そのことを感謝いたします。」そして自分の善行をくどくどと並べ立てています。この男は、自分を誇っています。神の御前においてさえ誇っているのです。これが神の選民であつたユダヤ人の最大の問題であつたのです。一方、取税人はどうかと言いますと、彼は目を天に向けることもできず、うなだれたまま、自分の罪を深く覚えて、「神様。このような罪人である私をあわれんでください」と祈りました。しかし、神に受け入れられたのは、取税人であつて、パリサイ派の人ではなかつたのです。

わたしたちは、だれひとりとして、自分の善行や、性格の良さ、頭の良さ、高度な学問や教養、家柄や身分、社会的地位や財産の多さによつて救われるものではありません。また、聖書の知識の深さ、神学に通じていること、あるいは自分の財産を社会や慈善事業にささげることによつて救われるのでもありません。また、難行苦行をし、あわれみ深い行ないをする事によつて救われるではありません。そのようなことをいくらやっても、人が罪人であるかぎり、「神の栄光を失ってしまった」のです。

ですから、「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによつて、賜物として義とされる」道を、神は用意してく

ださったわけです。「あなたがたが救われたのは、恵みによるのであり、それは信仰をもって受けたからである。これは、あなたがた自身が自分で獲得したのではなく、神の賜物である。行ないによるのではない。それは、だれひとりとして誇ることがないためである」と教えられておりました。そのことが、ここで言われていることにはかなりません。

「それでは、誇るところは、どこにあるのか。どこにもない。どういう原理によってなのか。律法を守るという行ないの原理によってか。そうではない。信仰という原理によってなのである。というのは、人が義と認められるのは、律法を守るという行ないによるのではなく、信仰によるのであるというのが、わたしたちの主張だからである。」

ここで、パウロの信仰の教えと、ヤコブの教えとの関係について考えてみたいと思います。パウロは「人が義と認められるのは、律法を守るという行ないによるのではなく、信仰によるのであるというのが、わたしたちの主張である」と言っております。ところで、ヤコブは、「人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう」としてしています。ことばの表面上の意味だけを見ると、矛盾しているように思われます。しかし、パウロが取り扱っている事柄とヤコブが取り扱っている事柄は違うのです。このことに注意しなければなりません。ヤコブが問題にしているのは、彼の時代に頭だけの信仰の人々がいて、生きた信仰でないために、愛のわざをうみださなかつたことに対してなのです。ですから、彼はそういう人々のこ

とを、「だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましよう。そのような信仰が人を救うことができるでしょうか」と言い、そういう信仰は死んだ信仰で、むなしなものだと言っているわけです。ですから、ヤコブが問題にしている人々の信仰は頭だけの信仰でありました。しかし、本当の生きた信仰は、真理を知り、それを受け入れ、それに自分自身のすべてをかけるのです。しかも、その真理の内容は、生ける神ご自身であり、恵み深い救いの神です。その神との交わりから来る力によって、わたしたちは愛のわざを行なうことができるわけです。わたしたちが愛のわざを行なうことができるのは、キリストの贖いの御業を信じ受け入れたことによって、罪が赦され、罪の束縛から解き放されたからで、自分が生まれながらに持っている力ではありません。自分の力で救われるのではなく、自分の力で愛のわざができるのではありません。徹頭徹尾、神の力によるものです。その点において、パウロの教えているところと、ヤコブの教えているところに相違はありません。矛盾はないのです。

聖書が一貫して教えているところは、人間が自分の何かによって罪の問題を解決することは不可能であって、神が恵みにより、キリストの贖いを裏づけとして、わたしたちを救ってくださいさるということです。そして、救われた者たちは、神の賜物として、愛のわざを行なうことができるということです。ですから、わたしたちの誇るところは全くないのです。わたしたちをそのようにしてくださいさる神だけを誇り、神だけ

がほめたたえられなければなりません。

注(1)ガラテヤの諸教会への手紙二章一一―一二節。

(2)ローマ教会への手紙三章二三節。

(3)同書三章二四節。

(4)ピリピ教会への手紙三章五節。

(5)ガラテヤの諸教会への手紙一章一四節。

(6)ルカによる福音書一八章一一節 現代訳。

(7)同書一八章一三節 現代訳。

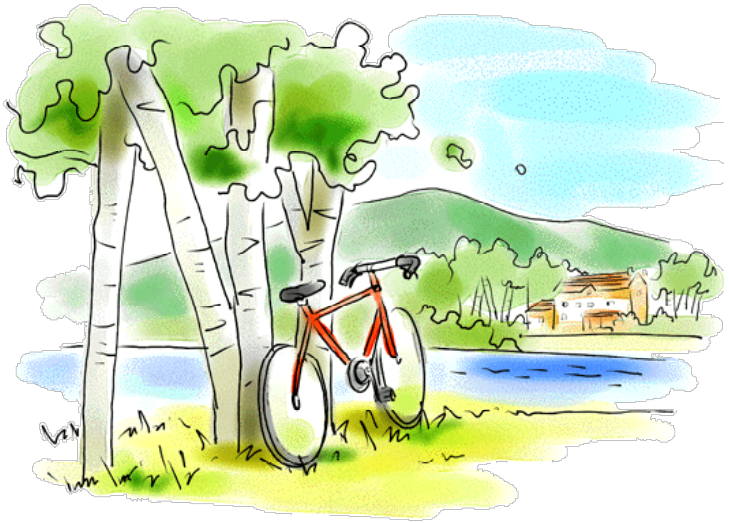
(8)エペソ教会への手紙二章八―九節。

(9)ヤコブの手紙二章二四節 新改訳。

(10)同書二章一四節 新改訳。

(11)同書二章一七節。

(12)同書二章二〇節。



尾山令仁・ローマ教会への手紙(ロイドジョンズ・ロマ書講解要約)より